

「おいでになるはずの方」

ルカの福音書 7:18~28

はじめに

今日の箇所は、3章で登場したバプテスマのヨハネが再登場します。しかし彼はこの時、ユダヤの領主であったヘロデを非難したために捕らえられ（ルカ 3:19、20）、ペレヤの南、死海の北端から東に 15 kmほどの位置にあるマカイロスの砦に幽閉され、その獄中にありました。そこで彼はイエシュアのうわさを耳にし、二人の弟子を代理としてイエシュアのみもとに遣わした、という背景があります。では今日もここにどのような神のご計画の奥義が秘められているかを、聖書の原語ヘブル語を用いて見てまいりましょう。



1. ヨハネの言づけ

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:18 さて、ヨハネの弟子たちは、これらのことをすべてヨハネに報告した。すると、ヨハネは弟子たちの中から二人の者を選んで、

7:19 こう言づけて、主のもとに送り出した。「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、ほかの方を待つべきでしょうか。」

7:20 その人たちはみもとに来て言った。「私たちはバプテスマのヨハネから遣わされて、ここに参りました。『おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、ほかの方を待つべきでしょうか』と、ヨハネが申しております。」

バプテスマのヨハネからの「言づけ」を持って遣わされた二人の弟子。彼らの使命は、イエシュアとは誰で、どのような人物かという、イエシュアについての情報を収集し、それを報告、伝達することでした。彼らの存在、働きはイエシュアを知り、宣べ伝える私たち教会の姿を表しているようです。「二人の者」とは正当な、立証される証言を意味します（申命記 19:15）。私たち教会はイエシュア・メシアの正当な証言者なのです。そしてここに私たち教会が知らなければならない、覚えなければならない最大の、いや唯一の真理が表されています。それはイエシュアとは「おいでになるはずの方」と呼ばれる御方だということです。おいでになる、来るべき、必ず来られる御方、それが私たち教会が覚えなければならない、そして宣べ伝えなければならないイエシュアについての証言、メッセージです。その事実がこの箇所には指し示されているのです。もちろんイエシュアは神の御子であり、十字架の死によってイスラエルの罪を贖い、三日目によみがえられて今も生きておられ、神の右の座におられる御方です。しかしその御方がやがて再びこの地に来られる「おいでになるはずの方」であることが、この箇所には二度も繰り返され強調されているのです。そのように、今私たち教会が知らなければならない、覚えなければならない、そして伝えなければならないこと、それはイエシュアの来臨、再臨なのです。後述します数々の癒しや解放、きよめの奇蹟はみなイエシュアの再臨によってもたらされる御業の「型」比喻、たとえにすぎないのです。で

すから私たちが待つべきなのは「**おいでになるはずの方**」であるイエシュアの再臨であり、他の者でも他の出来事でもないことを覚えてください。

バプテスマのヨハネ、かつて彼は自分についてこう証言しました。「私は、預言者イザヤが言った『**主の道をまっすぐにせよ、と荒野で叫ぶ者の声**』です。(ヨハネ 1:23)」と。この「声」のことをヘブル語でコール(קול)というのですが、この言葉に「息、いのち、見る」を意味するヘブル文字ヘー(ה)が中に入るとカーハール(קהל)となり、これは「群れ、集会」という意味になり、まさに私たち「教会」を表す言葉となるのです。つまり「教会」はヘブル語に訳すとカーハールといえます。ちなみにイスラエルの父祖アブラム(אַבְרָם)は、このヘーの一文字を与え



られてアブラム(אַבְרָם)となりました。ですから私たち教会、カーハールは、神の選び、いのちの息である聖霊をうちに与えられた「声」であり、イエシュアの再臨を宣べ伝える、生きた神の「声」なのです。この事実はヘブル語でなければ決してわからない、教会、集会、チャペル、チャーチ、そしてエックレーシアなどという言葉では絶対に見えてこない奥義です。ですから私はカーハール空知太、空知太カーハールとでも改名したい気持ちですが、この教会をイエシュアが「**おいでになる**」こと、主の来臨、再臨を告げ知らせる、神の生きた声として用いていただきたいと切に願っています。

そして「**おいでになるはずの方**」をヘブル語ではハッバー(הַבָּר)といい「来る、行く、もたらす」という意味のボー(בוא)がその語源です。この最初の言及を見てください。

創世記【新改訳 2017】

2:19 神である【主】は、その土地の土で、あらゆる野の獣とあらゆる空の鳥を形造って、人のところに**連れて来られた**。人がそれを何と呼ぶかをご覧になるためであった。人がそれを呼ぶと、何であれ、それがその生き物の名となった。

これは最初の人であるアダムがすべての生き物たちに名前をつけるという場面ですが、「**人のところに連れて来られた**」という箇所には聖書で最初のボーがあります。ですからボーとは本来、「集める、名を呼ぶ」という意味を持った言葉だということです。そしてこの記述は終わりの日の神のご計画の「型」であり、やがて最後のアダム（I コリント 15:45）と呼ばれるイエシュアのみもとに神がその名を呼ばれる、選びの民であるイスラエルと私たち教会がみな一つに集められることが表されており、それが成就するのがイエシュアの再臨、イエシュアがこの地にまさにボー(בוא)される時であり「神の国」がこの地上に建てられる時なのです。この事実、神のご計画を知り、覚え、宣べ伝えることこそが私たち教会、カーハールの役目、使命であることをぜひこのバプテスマのヨハネとその弟子たちの姿から学んでいただきたいです。

ついでに少し余談になりますが、バプテスマという言葉のヘブル的解釈についても述べておきたいと思えます。このバプテスマ、日本語では洗礼と呼ばれる言葉の由来は、ヘブル語では「浸す、沈める」という意味のターヴァル(טָבַל)となります。このターヴァルは本来、身体を水に浸す、ではなく「衣を血に浸

す」という意味の言葉なのです（創世記 37:31）。聖書の中で血に染まった衣を身にまとわれる御方はただ一人です。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確か
で真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない
名が記されていた。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

イザヤ書【新改訳 2017】

63:1 「エドムから来るこの方はだれだろう。ボツラから深紅の衣を着て来る方は。その装いには威光が
あり、大いなる力をもって進んで来る。」「わたしは正義をもって語り、救いをもたらす大いなる者。」

これらの預言は、イエシュアが地上再臨される時のものです。バプテスマ、洗礼とは本来はターヴァルで
あり、「血に染まった衣をまとい」、地上に再臨されるイエシュアを指し示す、覚えるためのものなのです。
私たちは洗礼を受けたから救われるものではありません。「おいでになるはずの方」イエシュアが地上に再
臨され、お建てになる「神の国」の民となるその時、私たちの救いが成就、完成、完了するのです。この
奥義、この真実をぜひ知っていただきたいのです。

2. 福音

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:21 ちょうどそのころ、イエスは病気や苦しみや悪霊に悩む多くの人たちを癒やし、また目の見えな
い多くの人たちを見えるようにしておられた。

7:22 イエスは彼らにこう答えられた。「あなたがたは行って、自分たちが見たり聞いたりしたことを
ヨハネに伝えなさい。目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトに冒された者
たちがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えら
れています。

7:23 だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」

イエシュアによって多くの奇蹟がなされていることが記されています。ところで私には息子が二人、娘
が二人与えられていますがその一人である次男の恵（けい）は目が見えません。生まれつき手足が不自由
で、歩くことはもちろん座ることさえできません。声は出せませんが言葉を話すことができません。彼は今
年で18歳になります。彼の心身の障害は、機能不全は、なぜ癒されないのでしょうか。私たち親の、彼
自身の信仰が、何等かの努力が足りないからでしょうか。そうではありません。イエシュアがまだ来られ
ていないからです。しかし重い障害、機能不全を抱えているのは彼だけではありません。私も、みなさん
もそうです。本当に大切なことが、真実が見えていません。聞こえていません。主の御心にかなった正し
い歩みが、生き方ができていません。悪霊、サタンからの偽りの情報にいつも心揺さぶられています。そ

して何より、日々衰えていくこの死の身体をどうすることもできていません。なぜ癒されないのでしょうか。私やあなたの信仰が、何等かの努力が足りないから、訓練が、クリスチャンとして整えられていないから、成熟していないからでしょうか。そうではありません。イエシュアがまだ来られていないからです。聖書には、私たちと同じような障害、機能不全に苦しむ人がこのような言葉を記しています。

ローマ人への手紙【新改訳 2017】

7:18 私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。

7:19 私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています。

7:20 私が自分でしたくないことをしているなら、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪です。

7:21 そういうわけで、善を行いたいと願っている、その私に悪が存在するという原理を、私は見出します。

7:22 私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいますが、

7:23 私のからだには異なる律法があって、それが私の心の律法に対して戦いを挑み、私を、からだにある罪の律法のうちにとりこにしていることが分かるのです。

7:24 私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

これを書いたのは、こう言って嘆いているのは誰でしょうか。イエシュア以外では聖書中おそらく誰よりも聖書に精通する人である使徒パウロです。彼は神のご計画の全体を余すところなく知っていた（使徒 20:27）人物です。彼はなぜ癒されなかったのでしょうか。答えは同じです。イエシュアがまだ来られていないからです。なぜヨハネの黙示録 22:17 に御霊と花嫁は「来てください」と言い、これを聞く者も「来てください」と言いなさい、と書いてあるのですか。イエシュアがまだ来ていないからです。この御方によって、パウロが言っている「この死のからだから…救い出して」いただかない限り、問題は何も解決しないのです。そして、その解決は以下の御言葉のとおりになされます。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

4:18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

これはイエシュアの地上再臨のその前に起こる、同じくイエシュアの空中再臨による携挙の預言です。これもまた神のご計画の全体を余すところなく知っていたパウロによって記されました。この出来事もまたイエシュアが「天から下って来られ」ること「おいでになる」ことによって起こります。私たちの死の身体は、不死の身体、永遠のいのちの身体に変えられます。さらに「いつまでも主とともにいる」存在となります。私は息子の恵がその日、イエシュアの御前で喜び踊りながら主をほめたたえるようになる日が待

ち遠しくて仕方ありません。もちろん私自身もそこにおいてイエシュアにすぎりつくその日を今日か明日かと待ち望んでいます。これが、これこそが福音、良い知らせと呼べるものであり、人が「互いに励まし合」うために宣べ伝えるべき御言葉ではないでしょうか。

3. 何を見るか

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:24 ヨハネの使いが帰ってから、イエスはヨハネについて群衆に話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒野に出て行ったのですか。風に揺れる葦ですか。

7:25 では、何を見に行ったのですか。柔らかな衣をまとった人ですか。ご覧なさい。きらびやかな服を着て、ぜいたくに暮らしている人たちなら宮殿にいます。

7:26 では、何を見に行ったのですか。預言者ですか。そのとおり。わたしはあなたがたに言います。預言者よりもすぐれた者をです。

7:27 この人こそ、『見よ、わたしはわたしの使いをあなたの前に遣わす。彼は、あなたの前にあなたの道を備える』と書かれているその人です。

「何を見に行ったのですか」とイエシュアは三度も問うておられます。そしてイエシュアが来られることを知らせる「声」であるヨハネを「預言者よりもすぐれた者」と呼んでおられます。先ほどこのヨハネは私たち教会、カーハールの「型」であると述べました。つまりイエシュアは私たち教会をそのように呼んでおられる、用いられるということです。確かに今日、イエシュアの再臨を信じ、これを宣べ伝えることができるのは私たち教会だけです。そのような教会を見なさいとイエシュアは言っておられるのです。

ここにイエシュアがたとえておられる、いくつかの事柄について述べておきます。「荒野に…風に揺れる葦」とは預言者モーセの時代、荒野をさまよったイスラエルの民を表す比喩です。この時代に主はイスラエルに十戒をはじめとする律法をお与えになりました。しかし民はその教えを何一つ守ることができませんでした。また「柔らかな衣をまとった人」とは栄華を極めたソロモンに代表されるかつてのイスラエル王国です。今日でもユダヤ人たちはこの時代を復興しようとしています。その王としてのイエシュアを認めてはいません。イスラエルの民が真に見なければならぬものはモーセの律法の体現者であり、イスラエルの王、王の王、主の主であられるメシア、イエシュアなのです。その主イエシュアの「おいでになる」こと、来臨を知らせるコール「声」であるヨハネと、彼のうちにたとえられた、イエシュアの再臨を宣べ伝える私たちカーハールである教会を見なさい、その声、知らせ、福音を聞きなさいとイエシュアは言っておられるのです。私たち教会の、この時代における果たすべき役割、使命の重要性をぜひ覚えていただきたいです。しかし、逆に言えば、イエシュアの再臨を教えない、宣べ伝えない教会は、教会ではあっても、ここでイエシュアが言い表しているカーハールではないということです。どうかこのメッセージを聞くすべての人が主イエシュア「の前に…道を備える」者、すなわちイエシュアの再臨を伝えるカーハールとして立てられ、用いられますように。

4. 神の国

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:28 わたしはあなたがたに言います。女から生まれた者の中で、ヨハネよりも偉大な者はだれもいません。しかし、神の国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。

しかし、そのような「声」よりも、カーハールとしての教会よりも、偉大な存在が最後に明言されています。「神の国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。」イエシュアの再臨によって地上に建て上げられる「神の国」千年王国、メシア王国とも呼ばれるその御国に住まう人々が、いかに素晴らしく、また優れた、幸いな存在であるかということがここに言い表されているのです。なぜならイエシュアがいつまでもともにおられる、永遠のいのちの身体を与えられた民だからです。私たちが目指すべきなのは、優れた聖書学者、説教者、奉仕者ではありません。この「神の国」の民とされることなのです。それは私たちの信仰の力でも業でもなく、知恵や能力でもなく、ただハッピーである方、「おいでになるはずの方」、主イエシュアによって、その再臨によってのみ成し遂げられる、神の御業、神のご計画です。このように、イエシュアの再臨と「神の国」の到来、そして私たちがその民となることはまったく同義なのです。

あなたは今、イエシュアの再臨を待ち望んでいますか？求めていますか？イエシュアの再臨を宣べ伝える使命を与えられているはずの教会が、私たち自身がそれを求めないで、どうして宣べ伝えることができるでしょう。自分が欲しくない、好んでいないものを、どうして人に勧めることができるでしょう。どうか、私の、あなたの期待が、楽しみにしていることが、今年のカレンダーやスケジュール帳に書いてあることではなく、聖書に書かれている神の予定、神のご計画となりますように。主イエシュアの御名によって祈ります。

ピリピ人への手紙【新改訳 2017】

3:20 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。

ヘブル人への手紙【新改訳 2017】

10:37 「もうしばらくすれば、来たるべき方が来られる。遅れることはない。

ヤコブの手紙【新改訳 2017】

5:8 あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主が来られる時が近づいているからです。